

Report on the Villages in East China (8) : The Jiangsu Province Villages in September 2013

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36859

華東農村訪問調査報告(8)

—— 2013年9月、江蘇省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、これまで華東農村を幾度か訪問してきたが¹⁾、今回の華東地域への訪問は、これまでよりやや短い約10日間で、以下のような日程で行った。

2013年9月19日、金沢を出発して小松空港から上海浦東空港へ移動し、翌20日午前には南京へ高速鉄道で移動して4泊した。そして、24日午前は無錫に高速鉄道で移動して3泊し、農村において聞き取り調査を行った後、27日午前には高速鉄道で上海に戻って2泊して、29日に帰国した。このうち、南京市滞在中は南京市溧水区(旧溧水県)を訪問し、上海市滞在中は上海市嘉定区馬陸鎮石崗村を訪問した。

上記の訪中期間中に、文献資料調査を行う以外にも、各地の農村地域を参観した。ただし、無錫では、今回も湯可可氏や呉文勉氏の協力を得て2ヶ村において聞き取り調査を行う予定だったが、今回、聞き取りを実施することができたのは馬鞍村1ヶ村にとどまった。

なお、本稿においても、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として常用漢字と算用数字を用いた。

I. 江蘇省無錫市農村－胡埭鎮馬鞍村

湯可可氏によれば、胡埭鎮馬鞍村の楊興初(88歳?)氏はすでに死去してお

り、王岳清(81歳?)氏は健康状態がよくなく、もはや話を聞くことができるような状態ではなくなっているということだった(両氏には2008年9月に面会している²⁾)。また、栄巷街道小丁巷の栄紀仁氏とは連絡が取れなくなっているという連絡を受けていたので、9月24日午後、栄紀仁氏宅まで行ってみたが、家族の人もいなかった(家族で海外旅行に出ているのかもしれない)。このため、今回は、胡埭鎮馬鞍村において呉文勉・王望榮・王少生の3氏から話を聞くことになった。

聞き取り日時：2013年9月25日(水) 10:55～11:10, 12:15～14:15
26日(木) 9:50～11:30, 12:15～13:20

聞き取り場所：無錫琳達織造有限公司(鴻翔村鴻翔路28号、写真1を参照)3階会議室

聞き取り対象者：呉文勉・王望榮・王少生

聞き手：湯可可・弁納才一

写真1. 新たに築造された無錫琳達織造有限公司工場



(1) 王望栄(1922年4月18日生れ)の家族

- ・祖父(王増泉, 1845年生れ?)は, 私塾で5年余り学んだ(家庭の経済状況がよかったから)。13畝の土地に稲・小麦・桑(2畝余り)を植えて養蚕を行った。祖父に兄弟はなく, 姉妹についてはよく知らない。
- ・祖母(武進県龔巷出身)については, 早死にしたので, 名前さえ知らない。
- ・父(王景春, 1893年生れ)は, 私塾で3年間学んだ。親戚の王慶培には子供がいなかったので, 父がその農地(水田3.7畝, 桑畑1.8畝)を「頂嗣」した。父は兄1人と姉妹1人の3人きょうだいである。
- ・父の兄(伯父, 王秀元)は, 気性が荒い(性格が強い)ので, 祖父(王増泉)が所有していた13畝の土地を兄弟の間で均分相続させずに全て(「両造平房, 両造楼房」を含む)1人だけで相続したが, 民国期(1910~19年頃)にアヘンを吸引して土地・家屋の全てを売却してしまい, 父(王景春)の土地・家屋も抵当に入れてしまった(このため, 父は土地所有権を失って小作農となってしまった)。また, 伯父(王秀元)の妻(王楊氏)は, 胡埭鎮の出身で, 実家の楊氏は飯店や茶館を経営していた。伯父との間には2人の娘と1人の息子がいたが, 1人の娘と息子は早死にし, もう一人の娘(長女)は石塘湾に嫁し, その娘の娘の娘(顧杏英)は石塘湾針織機械廠で働いている。
- ・父の妹(姑母, 呉王氏, 名前は不明)は, 閩江の呉躍清(私塾の先生)に嫁したが, 実家の人たちが結婚式の日に新郎をからかってはしゃぎすぎて, 塩を入れたご飯を食べて, その晩, 亡くなったので, 子供がいなかった。
- ・母(堵三大)の父(堵芝宣)は, 私塾の先生(科挙の秀才?)で, 多くの「算盤」の本を編纂して上海棋盤街で印刷・発行した。また, 母には2人の弟と2人の姉がいたが, すぐ下の弟(堵士度)は, 5畝余りの水田を耕作し, その妻は武進県雪堰橋の出身で, 一番下の弟(堵阿泉)は, 5畝余りの水田(そのうち分散地が2畝)を耕作し, その妻は武進県雪堰橋の出身だった。また, 上の姉は連干村(農民)に嫁し, 下の姉は20歳代で婚約したが, 川に落ちて溺れ死んでしまったので, 正式には結婚していなかった。
- ・3人の妹と3人の兄弟(みな早死にした。前稿までを参照)の計7人きょうだいで, 1番上の妹(王鳳妹, 実家では腊妹と呼ばれていた。1927年生

れ?)は胡埭鎮東街に嫁し、その夫(陳祥福)は豆腐店を営業していたが、解放直後の1950年に亡くなったので、豆腐店を閉めて、妹(王鳳妹)が供銷合作社のこの豆腐屋で定年まで営業員として働いた。2番目の妹(王菊妹)は、胡埭鎮河西の秦浩祥(1919~2008年、上海織布廠で「漿紗工」(糊付作業の労働者)、その後、常州織布廠で「漿紗工」)に嫁した。3番目の妹(王杏娣、1933年生れ)は、信大糸廠(無錫南門、跨塘橋と大公橋の間。社長は上海崇明島出身の王同楼で、その妻が後呉巷の出身だったので、本村人の中にはこの工場に働きに行く者が多かった)の労働者となり、解放後は無線電機廠の労働者となり、無錫城中に嫁し、夫(陳祥友、陳祥福の弟)は、麗新紡織廠(無錫六大資本家の1人の唐家の工場)の職員だった。

・妻(陸秀珍)の父(岳父、陸洪高)は、私塾の先生だったが、50歳以降は農業に従事していた。子供は妻を含めて5人の息子と2人の娘がいた。長男の陸紀大は、祖父(陸洪高の父)の土地(陸区鎮に7畝)を相続し、「木匠」(指物師)をやりながら、農業に従事した。次男の陸宜大は武進の親戚の養子となり、詳細はわからないが、抗日戦争中に比較的若くして死去した。三男の陸三大は、1954年春、四男の陸聽泉と五男の陸発泉(1922~2009年)とともに3人で自分たちの船で豚肉を浙江省湖州へ売りに行き、帰り荷として竹の子を積んで帰ってきていたが、1954年春、強風で船が沈没して、三男と四男は死んでしまった。その後、五男の陸発泉は、農業をしながら、商売もやっていた(夏にはアイスクャンディーを売っていた)。長女の陸月鳳は、閩江の農民の呉耀大に嫁したが、2人ともすでに死去している。次女の陸鳳秀は、武進県雪堰橋賢港の顧万昌(農民)に嫁し、キリスト教(耶蘇教)を信仰していたが、その夫は全く信仰せず、酒と賭博におぼれる生活していた。2人ともすでに死去した。

(2) 王少生(1933年8月11日生れ)の家族

- ・祖父(王坤榮)は、農業をしていたが、自分が生まれる前に亡くなっており、祖父の2人の兄は太平天国の兵隊にさせられたという。祖父の世代のことはほとんど知らない。また、祖母については名前さえ知らない。
- ・父(王錫根、1892年・辰年生れ、1981年に死去)は、学校に通ったことが

なく、農業をしていた。13畝の水田と数畝の畑を所有し、稲、小麦、桑などを植えていた。老後は、3畝を「養老田」とし、残りの土地を3人の息子に均分した(1人3畝余り)。父には2人の兄と3人の姉(名前は知らない)がいた。

- ・母(楊秀英, 1893年・巳年生れ, 胡埭鎮東街出身, 1969年に死去)は、文盲で、綿糸を紡いで絹布を織ったり、絹糸を紡いで絹布を織ったりしていたが、特に日本軍がやってきてからは、繭を売ることができなくなったので、家で絹糸(土糸)を紡いで絹布を織り、衣服を作っていた。母の父親は農業はせず、「魚行」(魚屋)を経営し、「外祖母」(母の母親)は無錫人の林氏が経営する林保和典當(胡埭鎮で最大の典當)で洗濯の仕事をしていた。また、母の兄(楊永生, 別名が楊和尚)が親の後を継いで「魚行」を経営し、太湖の魚や川魚を買い付けていた。
- ・私は3人の姉と2人の兄の6人きょうだいだった。1番上の姉(王賽金)は、武進県雪堰橋の徐金生(仕立て屋, 小作地を含む2~3畝の土地を耕作し、農繁期には我々兄弟が手伝いに行った)に嫁し、2番目の姉(王愛金)は、武進県雪堰橋湯莊の蔣炳良(上海鎖廠の労働者, 水田2~3畝(小作地)と畑2畝を耕作し、姉婿は胥山湾で水蜜桃を栽培して売って儲けていた)に嫁し、3番目の姉(王蘭金)は、胡埭鎮東街の楊根生(抗日戦争終結後、上海紗号で学徒をやっていたが、上海解放後は実家に戻って農業に従事)に嫁した。楊根生の祖父(楊朝根)と父親(楊漢大)は、賭博場で「東道主」をやっており、2~3畝の土地を所有していたが、耕作せず、土地を小作地に出していたので、土地改革の時に地主と規定されて土地を没収された。
- ・長兄(王炳生, 亥年・1911年生れ, 1995年に84歳で死去)は農業に従事し、その妻(侯阿鳳, 1913~2002年)は河西村(現在の富安村)出身で、若い時は上海に行って、数年、知人の紹介で「奶媽」(乳母)をやったことがある。長兄には5人の息子がいた。長男(王漢仁)の妻(陳桂珍, 武進県雪堰橋出身)は、すでに死去している。次男(王漢民)は、3歳で亡くなった。三男(王漢興)の妻(張素芬)は錢橋の出身だった。四男(王漢中)は、2年間、兵役に服し、その時の関係で洛社鎮の植物油廠の労働者となり、その妻(許鳳妹, 安鎮出身)と一緒に暮らしている。五男(王漢良)の妻(堵玉芬)

は、張舎出身で、実家は農家だった。

- ・次兄(王桂生、亥年・1923年生れ、2000年に77歳で死去)は、楊龍興の父親(後呉巷人)に仕立ての仕事を学び、上海へ行って小さな仕立て屋を開設して衣服を作っていた。その店の隣人の娘が「小毛」(幼名)と呼ばれていた妻(沈月英)だった。その後、国共内戦期(?)に上海を離れて(内戦による混乱を避けてか)、無錫の小木橋で小さな仕立て屋を開設し、さらに、その2～3年後(土地改革時期か?)には本村に戻って農業に従事するようになったが、農閑期には仕立ての仕事もした。次兄には2人の息子がいる。長男(王洪仁)の妻(徐福新)は庄橋頭出身で、実家は農家だった。次男(王洪義)は、農業兼「泥瓦匠」(左官)で、その妻(許明霞)も庄橋頭出身で、実家は農家だった。
- ・妻(徐仁鳳、1938年生れ、武進県雪堰橋出身)は、同世代の女性と同様に、裁縫ができる。実家は農家で、兄(徐仁興、農業兼仕立て屋、すでに死去)と妹(徐仁娣、胡埭鎮西部の張村の「鉄匠」(鍛冶屋)に嫁した)との3人きょうだいである。

(3) 昼食

初日の聞き取りでは、胡埭鎮(写真2を参照)のレストランで呉文勉氏に昼食を御馳走になった(写真3～写真5を参照)。工場からレストランまでは呉文勉氏の孫(写真5を参照)が自家用車で送ってくれた。

2日目の聞き取りでは、工場内の食堂(一般従業員用の食堂内の個室)で昼食を御馳走になった。ここでも、やはり茹でた河海老が出てきた(写真6・写真7を参照)。

(4) 工場内参観

2日目の午後、少し話を聞いた後に、工場内を見学した。工場の機械設備は、最新式のものが導入されているように見える(写真8・写真9を参照)。そして、それらの製品は、上海の系列会社(写真10を参照)を通じて大阪へ輸出されているようである。なお、帰る際に、同工場で生産された靴下セット1箱(日本への輸出用)をお土産としていただいた。

写真2. 胡埭鎮中心地の「胡埭商城」(繁華街)



写真3. レストランの食卓



写真4. 胡埭鎮の「名菜」



写真5. 太湖の魚



写真6. 工場内の食堂の食卓



写真7. 呉文勉氏(右)と息子(左)・孫(中央)



写真8. 紡績機械



写真9. 靴下縫製機械



写真10. 「上海琳達針織品有限公司」という名で梱包された製品



(5) 農村訪問

呉文勉氏の自宅は前呉巷にあり、王望榮氏と王少生氏の自宅は庄橋頭にあったことを確認することができた。

いくつかの家では、老人たちが麻雀をしていた。王少生氏の自宅にも電動麻雀機があった(写真11・写真12を参照)。

写真11. 王少生氏の自宅



写真12. 王少生氏宅内の電動麻雀機



写真13. 前呉巷(3階建て家屋より左側)と庄橋頭の村境



隣接する前呉巷と庄橋頭は、住居が密集して一体化している(写真13を参照)。そして、前呉巷から庄橋頭へ川沿いの小道を歩いて行くと、庄橋頭のはずれに庄橋がかかっており、橋の向こうには新築の小学校の校舎が見える(写真14を参照)。

2013年9月現在、前呉巷と庄橋頭の2つの村の周辺は、完全に農村が消滅して、工場や高層マンションが建設中である。

写真14. 前呉巷と庄橋頭の側を流れる川に架かる庄橋(橋の側面には「庄橋」とある)



II. 訪問地

9月20日(金)午前、高速鉄道に乗車して上海から南京へ移動する途中で、車窓から丹陽と鎮江の近郊に建設中のものも含めて高層マンションが林立しているのを見た。この両地域は、これまでやや開発が出遅れていた感じがあったが、2013年現在、建設ラッシュが起こっているように感じた。同日午後、コマニーを訪問して、翌21日にコマニー第2工場が建設されている南京市溧水区を案内していただくことになった。溧水は、筆者が留学していた1989年

頃には外国人が足を踏み入れることが許されていない未開放地域だったと記憶していたので、非常に強い関心を持って参観することになった。

(1) 江蘇省南京市

9月20日(金)16:00~17:40, 格満林(南京)実業有限公司いわゆるコマニー南京工場の総経理である沢田直樹氏が宿泊しているウェスティンホテル(地下鉄玄武門駅の近くに2011年に開業したばかりで、筆者が南京で宿泊している4星ホテルから徒歩で約5分のところにある5星ホテルである)のラウンジで歓談した。筆者と同様に、本日(9月20日)、南京入りしたばかりだった。19日(休)~21日(土)は中秋節で休業していたため、22日から操業を再開するという。

沢田氏によれば、溧水区は、最近、溧水県から南京市区に昇格したという。そして、近いうちに、南京空港(禄口)へ地下鉄路線が延長され(現在、すでに工事が行われているという)、さらに、溧水にも地下鉄が開通する予定であるという。また、昨年来の尖閣諸島国有化宣言に端を発する「反日」の動きは、同工場にとってはほとんど影響はなかったという(筆者は2012年9月18日前後、南京市中山路においてデモが行われたのを目撃した。日系企業というよりもむしろ中国企業であるという意識で事業展開しているという点を強調されていたことが強く印象に残った。

かつて仕事をしていた経験から、東南アジアでは中国(華僑資本)の影響力が非常に強いのではないかと、また、シンガポールは東南アジアにおける金融面では必要な位置を占めているのではないかなどの見方やインドネシアでの苦労話を聞かせていただいた。

沢田氏の話の聞いていると、政府の声明や統計発表だけではなく、現場(経済活動をしている企業など)の声に耳を傾けることが中国経済の実態と動態を理解する上で極めて重要であることをつくづく感じた。

沢田氏のご厚意により、9月22日午後、コマニー溧水工場用地を参観させていただくことになった。なお、溧水県は総支配人(会長?)の出身地だった(解放時に国民党とともに台湾に避難した)ため、コマニーが中国に進出する当初より工場進出が考えられていたところだったという。

沢田氏と別れて、筆者が宿泊しているホテル(鳳凰台飯店)がある湖南路を

歩いていると、中秋節の休暇中で、かつ週末の夕刻という事情によるのであろうか、人出が非常に多く、とりわけ、獅子橋歩行街(歩行者天国)へ向かう人が多かった。また、湖南路は南京市内の繁華街の1つであるが、再開発のために、湖南路の片側の建物がほとんど取り壊されていた(写真15を参照)。ビルの解体作業用の重機には「KOMATU」の文字が見える。

写真15. 南京市湖南路(山西路近く)



なお、前回(2012年3月)、金沢大学国際学類の学生を引率して訪問した際に³⁾、応対していただいた村中敏昭氏は昨年末に中国駐在を終え、本社勤務に異動となり、海外事業推進の業務についているとのことである。ただし、南京事務所にはしばしば訪れているようである。ちなみに、村中氏は、筆者とちょうど入れ違うように、9月19日(木)に帰国したという。

翌21日(土)、無錫行きの切符を購入するために南京駅に行き、ついでに南京駅バス停留所の方へ行ってみたが、以前と同様に、どうにもあかぬけない商店や宿が立ち並ぶ中で、いかにも田舎から出てきたばかりという人々がごったがえした混沌とした雰囲気が残っていた。また、南京駅で鉄道の時刻表を

購入して一瞥してみると、溧水駅にも停車する高速鉄道があることがわかった(浙江省の寧波・杭州方面から太湖の南を通って南京南站へ向かう路線)。

夕食は、WESTIN HOTEL(威斯汀酒店、ウェスティンホテル)と同じ超高層ビルのショッピングモールの7階にあるレストラン(南京大牌档)で食べたが、昨年と同様に大盛況だった。同階には、多くのレストランなどの飲食店があり、韓国料理店も盛況で、回転寿司の店(去年の同じ時期には全く客がいなかった)にも多くの客が入っていた。なお、台湾料理の店はなくなっていた(去年、一度だけ食事をして料金に見合った満足感は得られなかったことを思い出した)。

(2) 江蘇省南京市溧水区コマニー第2工場

22日(日)午後2時、南京市江寧区コマニー事務所を訪問すると、まず、新たに入社してきた入江沢竜氏と李梓豪氏を紹介された。このうち、入江沢竜(経営企画管理部副本部長。旧中国籍)は村中氏の後継者として南京に来ており、李梓豪(コマニー南京工場の会長李氏のご子息)は溧水のコマニー第2工場を立ち上げるために尽力しており、いただいた名刺の所属は格満林(南京)新型建材科技有限公司籌建部となっていた(ちなみに入江氏の名刺は南京事務所の会社名だった)。ついで、新たに作成されたプロモーションビデオを見せていただいた。前回は南京の業者に外注して作成したものだったが、今回は上海の業者に外注したものである、やはりより洗練されているという印象を受けた。

同工場のスタッフの話によると、2013年4月から南京市溧水県と高淳県は南京市溧水区と高淳区に昇格したようである。

なお、南京市江寧区コマニー工場の敷地面積が60畝であるのに対して、南京市溧水区コマニー第2工場の敷地面積はその2倍近い100畝にも及ぶ予定であり、溧水区の中心街と禄口飛行場との中間あたり(溧水区の中心街の西北部)の溧水経済開発区柘塘に位置しているが、詳細な住所番地などの名称は確定していないという。

こうして、コマニー第2工場の事実上の現場責任者である李梓豪氏に溧水区を車で案内していただくこととなり、午後3時頃に江寧区コマニー事務所を出発して溧水区コマニー第2工場へ向かった。その車中で、李梓豪氏に交通インフラの整備状況について尋ねてみると、南京南站から禄口(南京)機場までの地下鉄機場線は、当初、1915年の開通を予定していたが、最近、中央政府からの指示(贅沢な

宴会などを禁じる通達などと同様に、習近平体制の政策的指示)によって、地下鉄の工事も停止しているという。なお、この地下鉄機場線は飛行場からさらには溧水站(駅は第2工場の近くに建設される計画であるという)を通過して句容站(2013年現在、句容県から句容市に昇格していた)まで延長される計画であるという。一方、高速鉄道は寧杭(南京・杭州)線が2013年6月30日に開通したばかりだが、溧水火車站は溧水区郊外にあり、コマニー第2工場からは遠く離れているという。

2013年9月現在、コマニー溧水工場の建設(2014年3月完成予定)に向けて工事中である(写真16・写真17を参照)。

写真16. コマニー溧水工場用地入口



写真17. コマニー溧水工場用地



写真18. プレハブ作りのコマニー溧水工場仮事務所



プレハブ作りの仮事務所には、若い中国人スタッフ数名が事務作業に従事していた(写真18を参照)。

溧水経済開発区が成立してからすでにかかなりの年数が経過しているというが、コマニー溧水工場用地近辺の道路は、非常に閑散としており、作られたばかりという感じだった(写真19を参照)。しかも、周辺はようやく開発が始まったという雰囲気だった。

写真19. コマニー溧水工場用地近辺の道路



コマニー溧水工場の敷地と隣接しているところには、すでに康師傅(台湾資本)の工場が操業を始めていた(写真20を参照。手前中央のプレハブの建物の右側後方にかすかに見える建物が康師傅の工場)。

溧水人民医院(写真21・写真22を参照)は、もともとは溧水区の中心街にあったが、2年ほど前に郊外の現在の場所に新たに建造され、コマニーが病室の全てのドアを納品したということだったので、参観した次第である。その際、李梓豪氏が実際の入札から納品まで全てを担当したという(最近は、大型の商談はコネではなく、競争入札によって決定されるのが一般的になりつつあるという)。なお、溧水人民医院の周辺には高層マンションが林立していた。

写真20. コマニー溧水工場に隣接する康師傅の工場



写真21. 溧水人民医院全景



写真22. 溧水人民医院駐車場出入口



旧溧水県政府を継承した溧水区人民政府(写真23を参照。正門には守衛³があり、下車して撮影すると、制止される可能性もあったので、車中から撮影)と比較すると、溧水経済開発区政府は「服務中心」という看板を掲げており(写真24を参照)、見た目でもかなり開放的な雰囲気を感じる。

写真23. 南京市溧水区人民政府(旧溧水县政府)



写真24. 溧水經濟開發區行政服務中心(溧水經濟開發區區政府)



(3) 上海市嘉定区馬陸鎮石崗村

9月28日、上海市嘉定区馬陸鎮石崗村を久しぶりに訪問してみた。かつての石崗村の入り口には、「石崗路」の碑だけが残っており(写真25を参照)、かつての石崗村は全域が公園となっており、民家は一軒もなくなっていた(写真26を参照)。かつての風景とは一変していた⁴⁾。

写真25. 石崗村の入り口(左下に「石崗路」の碑が見える)



写真26. 公園となった石崗村跡地



おわりに

今回も、文献資料調査だけにとどまらず、湯可氏のご協力を得て江蘇省無錫市農村地域における聞き取り調査を実施することができた上に、多くの農村地域の現況を実見することができた。これは、全て多くの方々のご協力とご支援なくしては不可能なことだった。ここに、改めて謝意を表しておきたい。

ただし、今回は、無錫においてこれまで数回にわたって話を聞かせていただいていた榮巷街道小丁巷の榮紀仁氏から話を聞くことができなかつたし、また、馬鞍村でもかつて面談したことがあった楊興初・王岳清の両氏にも話を聞くことができなくなっていた。これらは、全て高齢なるがゆえである。今回の状況からも、歴史的な事項に関する聞き取り調査を可及的速やかに実施されるべき必要性和緊急性が極めて高いことを改めて実感させられた。また、南京・上海・無錫の市街地が急速に拡大(都市近郊農村部の都市化)⁵⁾しつつあるのを改めて実感することができた。

注

- 1) 筆者がこれまで華東農村において行ってきた聞き取り調査については、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号、2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月、江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号、2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月、江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号、2012年3月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月、江蘇省の農村」(『北陸史学』第60号、2013年2月)を参照されたい。
- 2) 拙稿「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)426頁を参照されたい。
- 3) 詳細については、拙稿「中国華東地域における日系企業等への再訪記録－2012年3月－」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号、2012年12月)を参照されたい。

- 4) 拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)296頁を参照されたい。
- 5) 近現代中国における農村の都市化については, 拙稿「近現代中国農村経済史分析の新たな枠組みと発展モデルの提示」(『金沢大学経済論集』第33巻第2号, 2013年3月)を参照されたい。